

Journal of Chubu University Education

No.17

2017

【教育資料】

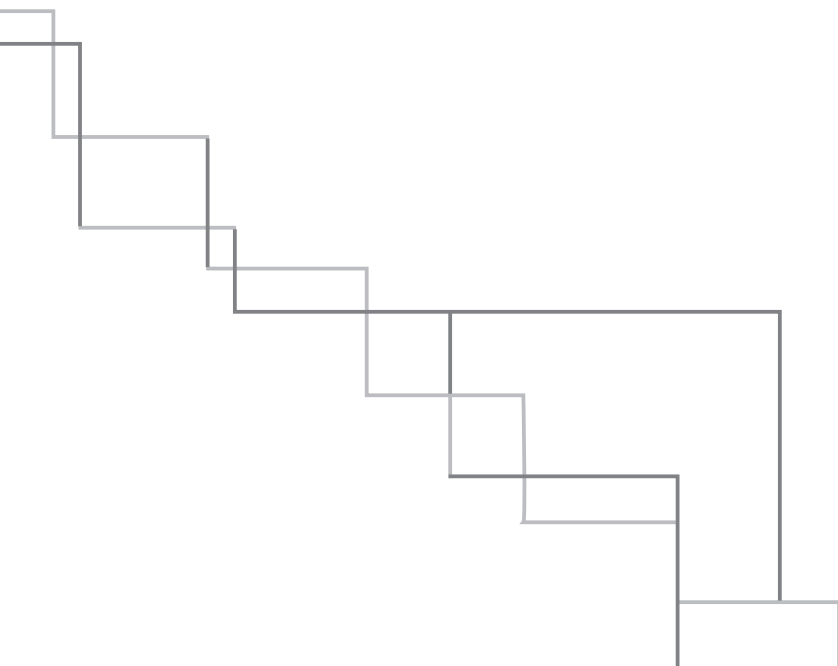
スポーツ保健医療学科第一回海外短期研修を終えて 岡村雪子・堀田典生
馬場礼三・北辻耕司

【Resources】

A Return Home Report on the First Short Overseas Training Program:

The Department of Lifelong Sports and Health Sciences

..... OKAMURA Yukiko, HOTTA Norio
BABA Reizo and KITATSUJI Koji



スポーツ保健医療学科第一回海外短期研修を終えて

岡村 雪子^{*1}・堀田 典生^{*2}・馬場 礼三^{*3}・北辻 耕司^{*4}

要 旨

2017年3月14日から3月19日の6日間、米国ロサンゼルスにおいて、救急救命士および健康運動指導の現状を学び、学生自身のキャリア形成に還元することを目的に、生命健康科学部スポーツ保健医療学科第一回海外短期研修を実施した。本学科1年生から4年生まで18名（うち女子学生4名）の学生が参加し、教員3名が同行した。主な研修内容は米国のパラメディックおよび健康運動指導の視察であった。パラメディック研修では救急救命士養成学校の見学・講義および実技トレーニングへの参加、民間救急業務会社の視察・見学、空港消防署の見学等を行った。健康運動指導研修では、スポーツトレーニングセンターの見学・講義およびトレーニング体験への参加を行った。研修中および研修前後における学生の学びから、次回以降、より充実した研修実現に向けた課題を明らかにすることができた。

キーワード

海外研修、留学、パラメディック、スポーツ施設、医療機関

1 研修に至った経緯

生命健康科学部スポーツ保健医療学科がスタートして以来、学科の海外研修の計画はないのかという問い合わせは一部の学生からではあったが度々あった。さらに、本学の長期・短期海外研修プログラムに参加する学科学生も年々増えたことにより、その必要性が増した。本学科のディプロマポリシーは、救急救命士と健康運動の指導者の養成であり、その両者が叶う研修の計画は難を極めたが、多くの方のご協力により、学科の第一回海外短期研修を開始することができた。

本報告の目的は、研修内容を振り返り、学生の学びや今後の課題を明らかにすることで、次回以降の本学科海外研修の充実を図るのみならず、広く情報共有することにより、大学全体の国際化および海外研修の促進に貢献することである。

2 研修概要と目的

海外研修は隔年開催で期間は1週間程度、学年に関係なく参加できるという条件に決まった。研修は、米国のパラメディック（救急隊員、日本では救急救命士に相当）とスポーツ施設や健康運動指導の視察であった。

研修の目的は、1）救急救命士を目指す学生も健康運動の指導者を目指す学生も、米国と日本の違いを見極め、お互いの長所・短所を明らかにすること、2）

そのキャリアに就いた際、米国の長所を日本にどのように導入したり活かしたりするか、また米国に行くことで気づいた日本の短所をどのように克服するかをまとめることであった。

事前・事後学習も設けられた。事前学習では、自らの課題設定のために、事前にパラメディックと健康運動の指導の現状をまとめた。また、英語学習のために本学PASEO（Preparation for Academic Study in English Overseas）の授業履修を強く勧めた。事後学習では、各自で設定した課題を、研修中あるいは帰国後に解決しまとめた。まとめたことは、報告会にて、プレゼンテーション形式により報告された。

3 研修の内容

第1日目：出国、中部国際空港から成田空港を経由しロサンゼルスへ

第2日目：ロサンゼルス、スポーツトレーニングセンター（スタブハブセンター）視察と実習

第3日目：リバーサイドコミュニティカレッジにてパラメディック実技研修、リバーサイド郡立メディカルセンターの病院視察、AMR（American Medical Response）ユニフォームショップ視察

第4日目：AMR視察、実習、空港消防署視察

第5－6日目：帰国、ロサンゼルスから成田空港を経由し中部国際空港へ

*1 生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 講師
*3 生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 教授

*2 生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授
*4 全学教育研究施設群 救急救命教育・実習センター 助手

3.1 スタブハブセンター

スタブハブセンターは、過去に英国サッカー代表ベッカム選手が所属していたLAギャラクシーというプロサッカーチームの本拠地として有名な場所である。

施設の視察を行った後、そこに常駐し、多くの運動指導をしているエクソスという会社の見学を行った。講義では、どのように運動指導を一般化するのか、すなわち被指導者がトレーナーやインストラクターがいなくても自分で自分を運動指導させる方法、を学んだ。実習においてもそのコンセプトは変わらず、いかに環境や道具に頼らなくても運動指導ができるのかということを経験した。

幸運であったことは、名古屋市内にある大学を卒業後、アメリカの大学に入り直し、プロの運動指導者を目指すためにエクソスにインターンシップに来ていた日本人との交流があった。このことは少なからず学生がキャリアを考えることに良い影響をもたらしたと考えられた。



写真1 スタブハブセンター入口にて



写真2 トレーニング体験中の学生達



写真3 トレーニング体験中の学生達



写真4 トレーニング終了後の記念撮影

3.2 スキルトレーニング

午前中はリバーサイドコミュニティカレッジのパラメディック学科でスキルトレーニングを受講した。学生たちは4つのグループに分かれて、ローテートしながら4つの手技（骨髄輸液、気管挿管、静脈穿刺、心電図）の習得についてトレーニングした。実際に手を動かしながらの実習であり、学生たちは目を輝かせて取り組んでいた。今回の研修旅行で最も学生たちに喜んでもらえた時間であったようである。また、オメガコードと呼ばれるシミュレーショントレーニングの見学も行った。

昼食はリバーサイドコミュニティカレッジで現地の教員たちとともに摂った。学生たちは極めて熱心に、言葉の壁もものともせず質問を投げかけていた。



写真5 スキルトレーニング受講中の学生達

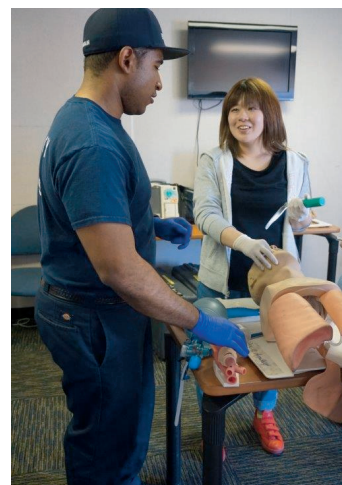


写真6 気管挿管のトレーニング



写真7 現地教員・学生と共に昼食をとる

3.3 病院見学（救急、児童虐待、小児科）

午後はリバーサイド郡立メディカルセンターの救急外来、病院施設の見学であった。救急医療部門の担当者より、施設の概要について説明がなされた後、施設の見学を行った。

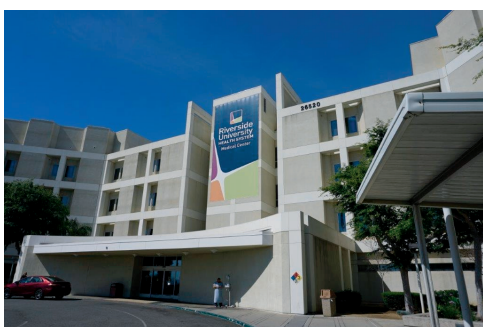


写真8 リバーサイド郡立メディカルセンター

リバーサイド郡立メディカルセンター（以下、センター）は主に外傷・脳卒中・小児医療（児童虐待含む）・敗血症を専門としている。救急外来には1か月あたり約1,600件の受入要請があり、重症外傷事例は年に約1,700人搬送され、地域のセーフティネットとして機能している医療機関であると説明があった。また遠隔地の傷病者に対応するため、ドクターヘリによる救急搬送を行っている（パラメディックが同乗）とのことだった。

ER外傷センターは38床で常に満床であり、見学時にもER外に処置を待つ多数の傷病者が待機していた。

小児医療部門では小児ICU（8床）、小児科病棟およびチャイルド・プロテクト・サービス部門の見学を行った。

日本同様、米国においても児童虐待は深刻な社会問題であり、センターでは特に3歳以下の子どもの事例が多く、身体的虐待と性的虐待の比率は1対1であるとのことだった。

虐待事例の把握は外傷等による外来受診時、電話による救急要請時、学校関係者からの通報等多岐に渡り、病院関係者のみならず、パラメディック・学校・警察など子どもを取り巻く全ての職種が連携して、子ども

の保護に努めている。

センターの役割は子どもの代弁者となることであり、子どもが安心して診察を受けられるよう、診療部門から離れたところにインタビュールームを設けるなど、環境面にも十分配慮しているとのことであった。またパラメディックにとっては、救急要請のあった現場での子どもの証言が真実に近いため、子どもと接触した際もれなく情報収集を行うことが重要である。

施設見学後のディスカッションでは、日米の保健医療システムの相違点（医療保険制度等）、感染標準予防策の基準について、薬物依存（主に麻薬）傷病者の治療等が話題に挙がった。

学生からは「地域が広大なため病院までの距離が遠く、だからこそ救急救命士ができる処置や薬剤投与の幅が広いことは、傷病者にとっても病院にとってもメリットがある」「保健医療従事者それぞれが専門外の職種に対して絶対的な信頼をしており、チーム全体で保健医療サービスを支えていることが感じられた」といった感想が聞かれたことから、見学を通じて、救急医療における米国と日本の相違点や課題に気づくことができたようである。

3.4 AMR見学

午前中は米国最大規模の民間救急業務会社であるAMRおよびNCTI（パラメディック等養成学校）の見学を行った。



写真9 NCTI（パラメディック等養成学校）

最初にNCTIの教員より気道確保について講義があった。解剖学から始まり、処置の原則とその根拠についてイラストを交えたスライドを用いて、わかりやすく講義して下さった。

講義を通じて、一刻を争う救急現場であるからこそ、傷病者に必要な処置の原則とその根拠を正しく理解することが、正しい判断そして行動につながっていくことを再確認した。

次にAMRの管理担当者であり、パラメディックであるDerek Gray氏より、骨髄穿刺の実技演習が行われた。

米国では、プレホスピタルケアにおいて静脈路確保が困難な傷病者に対し、パラメディックが骨髄穿刺を行うことが認められており、緊急時に年齢、意識レベルや体型（特に肥満体の傷病者）を問わず実施できる利点があると説明があった。

そして実際に、電動式骨髄穿刺キットと1人1つの骨付き鶏肉を用いて、骨髄液吸引の実技演習を行った。学生全員が真剣な表情で、互いに教え合いながら実技演習に取り組んでいた。



写真10 骨髄穿刺デモンストレーション



写真11 骨付き鶏肉を使用した骨髄液吸引の演習を行う学生

実技演習を終えてからは、NCTI内の見学を行った。トレーニングに用いる救急資器材庫や、学生数人が1チームでシナリオに基づいたトレーニングを行っている場面を見学した。NCTIの学生は皆熱心にトレーニングを行っていたが、本学の学生に気づくと笑顔で手を振ってくれるなど、フレンドリーな歓迎ぶりであった。

AMRでは指令室を見学した。指令官と共に指令室のモニター画面を一緒に見ながら、緊張感あふれる実際のやりとりを見せて頂くことができた。指令室の勤務時間は12時間、2日勤務で2日休みという勤務体制で、入電から救急車の出動までは約1分とのことであった。

次にAMRが所有する救急車とその車内を見学した。初めて間近で見る米国の救急車に、学生は皆興味津々の様子であった。



写真12 AMRが所有する救急車の前で

昼食はAMR近くの公園で、AMRの職員や学生達が準備して下さったハンバーガーを共に摂った。職員が目の前でハンバーガーを焼き、学生にふるまってくれた。オープンエアの開放的な雰囲気もあり、学生達の緊張した表情が和らいで、リラックスして食事を楽しむ様子が伺えた。



写真13 学生達に昼食をふるまうDerek氏

昼食にはDerek氏も同席して下さった。共に昼食を摂る中で、自然とDerek氏を囲む輪ができ、学生が主体となってDerek氏とディスカッションする場が生まれた。通訳者を介して質問する学生もあれば、自ら英語で質問を試みる学生もあり、いずれも熱心にDerek氏と米国のパラメディックについてディスカッションを行っていた。Derek氏も学生の真剣な態度に応えて下さり、質問の一つ一つに丁寧に答え、それが更に学生のモチベーションを高めたようであった。学生とDerek氏とのディスカッションは事前に計画されたものではなかったが、「今・ここで学びたい」という学生の意欲と、それを引き出したDerek氏の熱意、通訳者のサポート、そして本研修での様々な経験等が融合して生まれた学びであったと実感している。



写真14 Derek氏とディスカッションする学生達

3.5 空港消防署

オンタリオ空港の空港消防署は、日本にないコンセプトのそれであった。この職員は、警察官と消防官を兼任しており、両活動についての説明があった。後者の活動については、大きな火災に備えた消火能力をもつ重機を中心に説明をしていただいた。

所内には運動施設もあり、職員への運動指導は義務化されていたが、運動指導を行うものはいないとのことであった。



写真15 消防服の着衣体験



写真16 消防署前での記念撮影

4 アンケートの結果

帰国後に学生に実施した、本研修内容についてのアンケート結果を表1に示す。

回答は参加した学生全員（18名）から得られた。学年では3年生が最も多く、卒業後の進路としては消防や救命士を目指すものの割合が最も高かった。

4.1 今回の海外研修について

- 1) 研修実施場所については、参加者全員が「良かった」と回答していた。
- 2) 研修の時期については、「適切である」と回答し

表1 研修内容についての学生アンケート結果

質問項目		n=18 回答数(%)
学年	1年生	3(16.7)
	2年生	6(33.3)
	3年生	8(44.4)
	4年生	1(5.6)
卒業後の進路	消防含む救命士	15(83.3)
	運動やスポーツに関わる仕事	2(11.1)
	未回答	1(5.6)
場所について	良かった	18(100)
時期について	適切	15(83.3)
	早い	2(11.1)
	わからない	1(5.6)
期間について	適切	4(22.2)
	短い	14(77.8)
金額について	適切	6(33.3)
	高い	8(44.4)
	わからない	3(16.7)
	未回答	1(5.6)
満足度ベスト1	スタブハブセンター	1(5.6)
	スキルトレーニング	9(50.0)
	AMR見学	8(44.4)
満足度ベスト2	LAバス観光	1(5.6)
	スタブハブセンター	4(22.2)
	2日目午後自由行動	1(5.6)
	スキルトレーニング	4(22.2)
	AMR見学	6(33.3)
	オンタリオ空港消防署	2(11.1)
満足度ベスト3	LAバス観光	2(11.1)
	スタブハブセンター	1(5.6)
	2日目午後自由行動	1(5.6)
	スキルトレーニング	3(16.7)
	病院見学	3(16.7)
	AMR見学	1(5.6)
	オンタリオ空港消防署	6(33.3)
	未回答	1(5.6)
全体の満足度	70%	1(5.6)
	80%	5(27.8)
	90%	7(38.8)
	100%	5(27.8)
次期研修の場所	同じでよい	9(50.0)
	変えたほうがよい	6(33.3)
	どちらでもよい	3(16.7)
次期研修の時期	同じでよい	15(83.3)
	変えたほうがよい	1(5.6)
	どちらでもよい	2(11.1)
次期研修の期間	同じでよい	4(22.2)
	長くてよい	11(61.1)
	短くてよい	2(11.1)
	わからない	1(5.6)
再度参加したいか	はい	17(94.4)
	いいえ	1(5.6)
今回不参加の学生に勧めたいか	はい	17(94.4)
	未回答	1(5.6)

たものが最も多く8割以上であった。

- 3) 研修期間については、「短い」と回答したものが最も多かった。
- 4) 金額について、最も多かった回答は「高い」であり、次いで多かったのは「適切」であった。

- 5) 満足度の高かったプログラムとして最も回答が多かったのは「スキルトレーニング」であり、次いで「AMR見学」「オンタリオ空港消防署見学」「スタブハブセンター見学」であった。
- 6) 研修全体の満足度を数値(%)で示してもらったところ、70%から100%までの回答が得られた。満足度が80%以上と回答したものが9割以上を占めていた。

4.2 2年後の海外研修について

- 1) 研修実施場所については、半数の学生が「同じでよい」と回答していた。「変えたほうがよい」と回答したものは、3割強であった。
- 2) 研修の時期については、8割以上の学生が「同じでよい」と回答していた。
- 3) 研修期間については、「(今回より)長くてよい」と回答したものが最も多く、6割を占めていた。次いで多かったのは「同じでよい(2割)」であった。
- 4) 再度参加したいかについては、9割以上の学生(18名中17名)が「はい」と回答していた。
- 5) 今回不参加の学生にこの研修をすすめたいかについて、9割以上の学生(18名中17名)が「はい」と回答していた。

4.3 研修に対する学生の意見

- 1) 研修プロモーションのあり方については、「初めは尻込みをしていたが、実際に行ったら色々学べてよい経験もできたため、行って絶対損はない」といった肯定的な意見が多く挙げられた。
 学生のアイデアとして、「額に見合ったどんなメリットがあるか伝える」「実際に行った学生が研修についてプレゼンし、学生目からの良い面を伝える」「アルバイト給料を少しずつ貯金する」等々挙げた。
- 2) 「パラメディック志望学生に対して、運動関連視察がどのような意味をもつか」についてたずねたところ、以下の意見が挙げられた。
 - ・救急救命士は体力のいる仕事なので、運動指導論に基づきトレーニングすることは無駄ではない
 - ・パラメディックに携わる人でもケガが多く、また体力が必要なため、運動関連を視察することで予防につながる 等々
- 3) 「健康運動指導を目指す学生に対して、パラメディック視察がどのような意味をもつか」についてたずねたところ、以下の意見が挙げられた。
 - ・ケガや事故に立ち会うこともあるので、救急隊に引き継ぐ際に救急隊がどのような活動をしている

か知っておく必要がある

- ・指導中に血圧上昇やケガなどで倒れる人が現れる可能性もあるので、処置などを知っておくことは大切
 - ・消防、救命士にはどのような筋力が必要で、どのようなケガのリスクがあるか勉強できる 等々
- 4) 今回の研修の改善点については、「研修期間を延ばしてほしい」という意見が最も多く挙げられた。また「自由時間を増やしてほしい」という意見もあれば、「自由時間を減らしその分研修を増やしてほしい」という意見もあり、評価が分かれた。費用面では、価格を下げてほしいという意見と共に、ホテルのランクを下ければよいとの意見もあった。
 - 5) 次回研修に参加する学生に向けたアドバイスとして、日本とロサンゼルスの時差、気温差で体調を崩した学生もあったことから、海外旅行時の体調管理の重要性が多く挙がっていた。服装の調整や常備薬持参の必要性、また出発前から生活習慣を整え研修にのぞむべきであるとの意見も挙げられた。
 - 6) 自由意見(一部抜粋)
 - ・研修に参加するか初めはとても悩んでいたが、参加してとても良かった。この経験は必ず今後に生きてくると思った。
 - ・研修が何年後も続いて、多くの学生が海外でいい刺激を受けてほしい。
 - ・将来のために今から少しずつ勉強して、同じ学年の人より一歩先を進みたいと思った 等々
 研修が良い経験になったこと、そして直接見聞きした経験を今後に生かしたいことなど、前向きな意見が多く挙げられていた。

5 医師からみた本研修内容

救命救急士養成についてのそのハイライトは3日目の午前とその後の昼食時間であったようである。実際に手を動かしての様々な手技のトレーニングは、本当に楽しそうに参加していた。学生たちには有用で、楽しい経験をしてもらえたと感じている。

一方で、様々な施設の見学も行ったが、見学が中心の研修であり、その有用性についてはやや疑問を感じたのも事実である。これからの本研修旅行のあり方として、どうすればいいのかをもう一度練り直す必要があるかもしれない。

6 看護師からみた本研修内容

今回の研修では健康運動指導とパラメディック、2つの側面を同時に視察することができ、そのことを通

じて、多職種連携のあり方を考える機会ともなった。

特に印象的だったのは、スタブハブセンターにおいて米国の消防士がケガの予防や体力づくりのためのトレーニング時に、運動指導者のサポートを活用しており、全く異なる職種である運動指導者と消防士とがつながっている点を見いだせたことであった。

看護師も病院、在宅、介護施設等様々な場で、あらゆる年代の傷病者を看護している。特に自ら姿勢を変えることのできない重症者や高齢者の看護においては、看護師自身の身体に負担をかけない、ボディメカニクスを考慮した看護技術が不可欠である。傷病者・看護師双方に安全で安楽な看護を行うためには、看護師自ら運動を含めた健康管理に取り組むことも必要であろう。そのために運動指導者からサポートを得ることが有効ではないかと、今回の研修を通じて示唆を得た。

パラメディックを目指す学生が、パラメディックだけを学ぶのではなく、パラメディックと健康運動指導のつながりに気づき、将来医療を支えるチームの一員として連携するにあたり、研修で得られた学びを活かしてほしいと願っている。そして今回研修に参加した学生の多くが、そのことについて貴重な学びを得られたと感じている。

7 救急救命士からみた本研修内容

今後、日本の病院前救護体制が米国と同等、もしくはそれに近い体制となる可能性を含め、米国と日本の様々な文化や習慣の違いを知ったうえで、日本の救急救命士を目指す学生が、自分に足りないことや、必要なもの、今後、日本の病院前救護体制が目指すべき姿を考えるために非常に有効な研修であると考えている。できれば救急車に同乗し、現場を体験できれば、帰国後に行われる同乗実習とリンクさせることができ、より米国と日本の病院前救護体制の違いを明確に知ることができるのではないかと考える。

8 健康運動指導者を養成する立場からみた本研修内容

冒頭で述べた通り、本学科は、救急救命士と健康運動の指導者を養成することで地域へ貢献を果たすということが使命の一つにある。本研修では、健康運動指導の視察時間が、救命関係のそれに比べて少なく、次回に向けて修正が必要である。

個人的には、今回の研修先のリバーサイド郡のすぐ近くには、世界で健康的な生活をしている場所の一つとして有名なロマリンドがあり、そこでの健康運動の指導の視察を実施したかったと後悔の念が残る。また、健康運動の指導とパラメディックをどのように関連付けるのかも難しい課題として残る。

9 まとめ

本研修に参加した学生は、救急救命士あるいは健康運動指導者と、目指す進路は異なるものの、米国におけるパラメディックと健康運動指導それぞれの特徴と、双方の共通点を学ぶことができた。学科では1年次からスポーツと保健医療両方の分野を学修するが、その延長線上に本研修があることを改めて実感した。

また1年生から4年生まで、幅広い年代の学生が参加したが、研修中のみならず研修前後も、年齢に関わらずお互いに助け合う様子が見られた。年齢は異なっても、スポーツという共通項があるからこそそのつながりであったと思う。そしてこのことも、研修への積極的な参加を促したと感じている。

研修に関わった教員も医師・看護師・救急救命士そして健康運動指導者を養成する立場の教員と、バックグラウンドが様々であったからこそ、ユニークな研修の実現につながったと考える。今後はお互いの特性を生かし、更なる研修の充実を図り、その成果を本学科学生のみならず大学全体へ還元することを目指したい。

A Return Home Report on the First Short Overseas Training Program: The Department of Lifelong Sports and Health Sciences

OKAMURA Yukiko^{*1}, HOTTA Norio^{*2}, BABA Reizo^{*3} and KITATSUJI Koji^{*4}

- *1 Lecture, Department of Lifelong Sports and Health Sciences, Chubu University
- *2 Associate Professor, Department of Lifelong Sports and Health Sciences, Chubu University
- *3 Professor, Department of Lifelong Sports and Health Sciences, Chubu University
- *4 Research Associate, Center for Emergency Medical Technician Practicum, Chubu University

Abstract

The Department of Lifelong Sports and Health Sciences in Chubu University carried out their first short overseas training program in the United States. The purpose of this program was to visit and learn about emergency medical care and health fitness program in the United States. In this article, we report on what the students have experienced and learnt through this training program.

Key words

Overseas training, Studying abroad, Paramedic, Sports facility, Medical institution